

曼珠沙華

と短歌

おちあい
落合けい子

先日、買い物帰りに通った畦に彼岸花が一つ咲いていた。茎はとても細く、丈は二十センチほど、花も子供の手ほどの小ささで、蕊も糸みたいで色も浅かったけれど、しっかりと立って咲いていた。十一月も近づいたころに咲く彼岸花を見たのはじめてだった。

彼岸に咲くから、彼岸花とはよく言ったものよね、の挨拶が今年はなかなか咲かないね、に変わった年だった。それほど二〇一二年は酷暑で、期間も長かった。それでも彼岸の終わり時分には咲き初め、当地では十月半ばまで咲き続けた。

彼岸花は幽霊花や火事花、捨子花など負のイメージで呼ば

れ、嫌われることが多いけれども、私は子供のころからこの花が好きだった。

半世紀以上も昔、母と母の姉(だったと思う)と三人、どこか広い畑のような所を歩いていた。母と伯母は立ったまま話して入っていて、私は初めて見る赤い花に誘われ、花摘みに没頭していた。どの位経った頃だろう、後方で聞きなれない母の甲高い声がする。どうも、摘んだ花を捨てなさいと言っているようだ。どうして、こんなに綺麗な花なのに、と思いつつながら、私は黙って突っ立っていた。すると、母はいよいよ捨てなさいと怒ったように言う。私は訳が分からず暫くぼかんとしていたのだと思う。やがて母の顔が泣くように崩れていくのを見て、なんだか母に悪いことをしている気がしてきて、意味が分からないままに花を捨て、母の傍に戻った。戻ると母は、「あの花には毒があるのよ」と眉を顰めた。

記憶はこの場面だけ鮮やかに残っていて、前後は欠落している。それ以来、私はあの赤い花が忘れられなくなった。

鱗茎にアルカロイド系の毒があるため毒花、痺れ花とも呼ばれているが、飢饉の折には水にさらして毒抜きをして飢えを凌いだとも、また田を荒らす動物が鱗茎の毒を嫌うから畦に、土葬の遺体を守るため墓に人為的に植えられたともいわれている。現在はアルツハイマーの薬にもなっているのだから、有難い花なのに、嫌われては可哀そうである。

もちろん当時はアルツハイマーの言葉すら知る由もなく、母は私が病気にでもならないかと心配してくれたのだと思う。その親心が切なくもある母との思い出の花でもある。

曼珠沙華ゆけどもゆけども畦赫しさびしくないぞさびしくないぞ

有史前に渡来せしとふ曼珠沙華園のうつつに燐を巻き締む
曼珠沙華憤怒してゐる美しく大和国原滅びの最中

曼珠沙華のくれなる騒ぐ畝をゆくをんな細りて曲がりて消
ゆる

彼岸花には千余りの異称があるらしいが、こんな花も珍しい
のではないかしらん。地方では、はっかけばあなどというユ
ニークな呼称もあり、また剃刀花や数珠花、墓花、死人花など
のイメージに反して、花の姿から天蓋花や、仏典に由来した天
上に咲く花という意味のある曼珠沙華とも呼ばれている。

私はこの曼珠沙華という響きが好きである。近代より曼珠沙
華の名で詠われた歌は、彼岸花より多いのではないかと思われ
る。

曼珠沙華ここにも咲きてきぞの夜のひと夜の相おもほゆる
かも
斎藤茂吉『赤光』

冬岡に青々として幾むらの曼珠沙華見ゆわれひとり来む

『寒雲』

曼珠沙華のするどき象夢にみしうちくだかれて秋ゆきぬべ
き
坪野哲久『桜』

秋の色ここにきはまり曼珠沙華わが身力も昏くそめたる

馬場あき子『ふぶき浜』

もう充分にあなたのことを思つたから今日の私は曼珠沙華

宮 英子『海嶺』

風を浴びきりきり舞いの曼珠沙華 抱きたさは時に逢いた
さを越ゆ
吉川宏志『青蟬』

まんじゅしゃげの言葉の調べなのか、神秘的な漢字の印象な
のか、曼珠沙華の歌はどこか甘やかな相聞の匂いがする。

茂吉の『寒雲』の歌は異色で、花ではなくて、葉の頃の曼珠
沙華を詠っている。

曼珠沙華は花が終わると細い葉のみが出て、春には枯れて秋
まで地上には何もない。そして秋には茎だけが伸びてきてまた
花を咲かす。姿も形も生育も不思議な花である。花と葉は会う
ことなく、花は葉を思い、葉は花を思うというロマンチックな
意の相思華とも呼ばれたりする。

歌を始めたころ、曼珠沙華を詠いたくて苔を二本、開花した
のを三本瓶にさして朝晩眺めていた事があった。ある日水を替
えようとして驚いたことに、茎の切り口が四つから五つに割れ
ていて、その一つ一つがさらに二つに割れて反り返っていたの
だ。まるで花が上にも下にも咲いているようで、それは不思議
な姿だった。二本の切り口は真っ直ぐだったから、苔で摘めば
茎は割れないのだろうか。来年試してみようと思いつつ、もう
何十年過ぎただろうか…。

曼珠沙華弾けて赤し藪かげに少女のわれとすれ違ふかな

次号は杉本容子さんをお願いします。